

藤井太郎著『十八世紀ニューイングランド漁業のグローバル・ヒストリー——タラ商人の書簡から読み解く環大西洋世界・地域社会・独立戦争への道』

薩摩 真介

近年、欧米の学会を中心に、海の歴史を扱うマリタイム・ヒストリー（海事史）が興隆しているが、その中において漁業史研究は重要な分野の一つとなっている。四年に一度開催されるマリタイム・ヒストリーの国際学会である国際海事史会議（ICMH）においても、漁業史やそれに類する報告は近年必ず姿を見せている。十八世紀ニューイングランド漁業史を対象とする本書は、このように海の歴史研究に欠かせない一分野である漁業史研究に、新たな貢献をなすものと言える。

なお、評者の専門についてあらかじめ一言申し述べておきたい。本書は主として大西洋史（環大西洋史）研究の枠組みに則っているものの、その軸足はニューイングランド側に置かれており、初期アメリカ史研究としての性格が強いものと言える。一方、評者は同じく近世大西洋世界の研究に携わっているが、専門はイギリス史およびカリブ海史であるため、初期アメリカ史の専門家とは言えない。それゆえ、本書評もあくまで初期アメリカ史の専門的見地からではなく、主に近世イギリス史やカリブ海史の観点から見た評となることを断っておきたい。

では、本書の構成を見ていこう。本書はニューイングランド漁業の

うち、十七世紀におけるタラ漁業の中心であり、これまで注目を集めてきたボストンではなく、それにかわって十八世紀に台頭してくる港町マーブルヘッドに焦点を当てている。本書は三部構成となっており、おおむね時系列に沿って、マーブルヘッドのタラ漁業の位置づけや実態、そして変遷が分析される。まず第一部第一章では、イギリス本国のロンドン商人（およびその下請けであるボストン商人）に金融・流通面で依存していた十七世紀マーブルヘッド漁業のあり方が説明される。第二章では、著者が「十七世紀型」サプライチェーンと呼ぶ、このロンドン商人を頂点とするシステムから、マーブルヘッド漁業が十八世紀初頭以降に自立を遂げていく契機となった諸要因が説明される。すなわちニューファンドランド沖合漁の発達、西インド市場、とくにフランス領西インド市場の開拓、そしてボストン商人を押しのけたイベリア市場への参入である。一方、第三章ではそのボストン商人もまた、フランス領植民地との密貿易などを通じて、「十七世紀型」サプライチェーンからの脱却を模索していたことが示される。

次に第二部では、マーブルヘッド漁業の経済的自立化の過程とローカルな勢力交代の関連が探られる。第四章では自立化の動きを牽引したマーブルヘッド内の牧師や商人などの有力者に焦点が当てられ、続

いて第五章では教会コミュニティを異にするマールヘッドの商人エリート層の交代、すなわちボストンと結びついた旧エリート層から、マールヘッド地域社会との結びつきがより強い新エリート層への交代が示される。

最後に第三部では、マールヘッドやボストンを含むニューイングランド地域の漁業全体が、イギリス本国の諸利害との対立を機に、ニューイングランド漁業利害としての一体性を増していく過程が描かれる。その際の対立の争点としては、一七六四年の砂糖法をめぐる西インド諸島利害との対立(第六章)、一七七五年規制法(*Restraining Acts*)につながるイングランド西部地方商人との対立(第七章)、強制徴募をめぐるイギリス海軍との対立(第八章)が扱われている。そして、このような衝突を通してまとまりを持つ集団となったニューイングランド漁業利害が、十八世紀後半に本国からの独立を志向するようになったと結論づけている。

本書の意義としては、まずなによりもこれが、植民地時代アメリカのニューイングランドのタラ漁業に焦点を当てた、おそらくは日本における初めての学術単著であるという点があげられるだろう。冒頭で述べたように、漁業史は現在のマリタイム・ヒストリーにおいても重要な分野の一つである。日本の西洋史研究において近世・近代の漁業史を扱った、あるいはそれに関連した近年の研究としては、管見の限りではフランス史における阿河雄二郎の研究やスウェーデン史の齋藤豪大の研究、スペイン(バスク)史における高垣里衣の研究などがある^①。一方、英語圏世界の漁業史、とくに近世の漁業史については、和田光弘のニューファンドランド漁業についての、また斎藤真琴のアイランド漁民についての論考や、坂本優一郎の簡にして要を得た概観などがあるものの、まとまった実証研究は日本ではまだ少ないように

思われる。本書は日本におけるそのような欠落を埋めたという点でも大きな意義があると言えよう。

また、本書の特徴であり長所でもある点として、タイトルで「グローバル・ヒストリー」と銘打っているように、ローカルな分析をグローバルな(より正確には大西洋史的な)文脈に巧みに接合していることが挙げられる。まず本書では対象地域を「ニューイングランド」という言葉で一括りにせず、その内部の差異を丁寧に分節化して、ボストンとマールヘッドをはじめとするエセックス郡の港町との間の対立を浮き彫りにし、さらに、マールヘッド内部のポリティクスも分析している。

もつともこれだけであればニューイングランド地域史の枠組みにとどまる研究となっていたことであろう。しかし本書では、漁業史という分野の特性もあって、分析の対象地域はさらに大西洋世界へと広がっていく。本書では、このマールヘッド漁業の勃興や経済的自立化の動きが、中心的漁場であるニューファンドランド沖合のみならず、干しダラの市場であったカリブ海地域(とくにフランス領植民地)や、イベリア半島とも深く結びついていたさまが描かれるのである。このように、ミクロなレベルで地域社会の構造や変遷を扱いながらも、それをより大きな文脈のなかに巧みに位置づけ、大西洋世界全体に広がる大きな見取り図を描いているのが、本書の最大の魅力であり強みと言えよう。

しかし、このような魅力がある一方、本書にはまだ掘り下げる余地のある点が少なくないようにも思われる。まず、本書の前半部(第一部と第二部)の議論において重要な位置を占める「十七世紀型」サブライチエーンの解体とその因果関係についてである。著者は、その解体の最大の要因をニューファンドランド沖合漁の発達や西インドおよ

びイベリア半島との貿易によるマールヘッド漁業の自立化に求め（三九頁）、ロンドン商人やボストン商人に依存していたマールヘッドの商人たちが、自前の船で西インド・イベリア貿易を営むようになり、やがて自立化していく過程を、ゲリー家を例として描いている（第四章第二節）。このように、本書は、ある意味では進取の気風に富むマールヘッド商人の一種の「サクセス・ストーリー」としてこの自立化の過程を描いているようにも思われる。もちろん「十七世紀型」サプライチェーン解体の過程に、そのようなマールヘッド商人の行為主体性が一定の役割を果たしていたことは事実であるが、この自立化の図式には依然としていくつかの疑問が残る。

そもそもマールヘッドの商人たちが、従属状況を脱し自前でタラ漁業を行っていく際に鍵となる資金は、どこから得たのであろうか。本書ではその点にはあきらかにされていないように思える。

また、このサプライチェーンの解体に漁業以外の他の諸要因が影響を与えている可能性はないのだろうか。視野を漁業以外にも広げた場合、英領植民地をとりまく状況はより複雑な様相を呈する。マールヘッドを含むニューイングランドの重要な取引先の一つであった英領カリブ海植民地では、十八世紀に入ると、それまで中心的地位を占めていたバルバドスに代わり、ジャマイカやリウワード諸島などが発展していく。ステイールによると、それらの植民地との貿易においては、北米ではニューヨーク、そしてフィラデルフィアが台頭していったという^③。「十七世紀型」サプライチェーン解体の要因を考える際には、このようなカリブ海植民地の変遷や北米の他の貿易港との競合も考慮に入れる必要はないのだろうか。

本書の前半部では「十七世紀型」サプライチェーンの解体とマールヘッド商人の自立化が議論の中心軸をなしていたのに対し、後半部

（第三部）ではイギリス本国の諸利害との対立を通してニューイングランド漁業利害全体が独立の方向へと舵を切っていくプロセスが議論の主軸となっている。前半部がロンドン商人やボストン商人への従属からの自立を目指すマールヘッド漁業の「サクセス・ストーリー」であったとするならば、後半部は自身の利害に反する政策をとる本国からの独立を目指す、ニューイングランド漁業全体の「サクセス・ストーリー」であるとも言えよう。このようにアメリカ合衆国の独立を議論の終着点とすることは、初期アメリカ史研究としてはある意味では自然かつ自明のことと言えるのかもしれない。しかし、初期アメリカ史研究の外部の視点から見ると、そのような文脈に議論を位置づけることで、かえって抜け落ちてしまう重要な側面もあるように思われる。たとえば、十九世紀以降のニューイングランド漁業との連続性と変化の局面である。合衆国独立後も旧宗主国であるイギリスと合衆国の貿易は依然として活発に行われていたことはよく知られているが、ニューイングランド漁業の場合、そのあり方は独立によりどのような影響を受け、どのように変化した（あるいはしなかった）のであろうか。

また、本書はイギリス本国との関係やイギリス帝国内部の問題にとどまらず、第二章でフランス領やオランダ領カリブ海植民地との関係も扱っており、そのことが本書に広がりを持たせ、本書の魅力の一つともなっている。しかし、このような広い視点は、十八世紀、とくにその後半に焦点を当てている第三部において、議論を独立革命の文脈に位置づけたことで後景に退いてしまったようにも思われる。しかし十八世紀後半にも、これら外国領カリブ海植民地の役割は依然として重要であった。たとえば、本書でも言及されているオランダ領セント・ユースタティウス（シント・ユースティヤス）島は、近世オランダ

ダ領カリブ海植民地の密貿易を研究したクルースターによれば、十八世紀後半までには同じくオランダ領のクラサオ（キュラソー）を凌いで、カリブ海におけるオランダ領随一の商品集散地に成長していたという。北米植民地との結びつきも強く、アメリカ独立戦争中には、イギリスとの貿易が途絶し行き場を失った北米産品の市場、そして北米植民地人側への火薬などの軍事物資の供給者としても重要な役割を担っていた（その結果、第四次英蘭戦争ではイギリス海軍の標的となった）⁴。もっぱら本国の諸利害との対立を扱っている第三部でも、第二部のように、大西洋世界における他国の植民地にも視野を広げることで見える像が変わってくる可能性はないのだろうか。もちろん、以上の指摘はいささかないものねだりと言えるが、これらの点は今後研究をさらに発展させていく上での方向性の一つの指針となるであろう。

最後に、本書には一点、やや物足りなく思われた点があったのも事実である。それは議論を支える史資料、とりわけ一次史料の扱いである。本書では、従来、貿易の計量的分析によく用いられてきた税関史料ではなく、タラ商人たちの私的文書を中心な一次史料として分析している。加えて、植民地で発行された新聞や同時代人の日記や自伝なども参照している。このような商人の私的文書の分析自体は重要であり、税関史料に表れにくい密貿易の実態を明らかにする点では有益であろう。しかし、他方で、本書の構想のスケールの大きさに比して史料の活用がやや限定的である印象をうけてしまうことも否めない。本書での分析対象を考えると、他の一次史料も参照すべきだったのではないだろうか。とくに第三部では砂糖法や規制法と言った議会制定法をめぐる対立や、イギリス海軍との対立を扱っていることを考えれば、議会文書や海軍関係の史料などの行政文書もより活用できたものと思われる。本書は確かに、マールヘッド漁業をはじめとする

ニューイングランド漁業をめぐる大きな見取り図を提示したと言えるが、その像はより多様な一次史料を組み合わせることでさらに緻密で豊かなものとなるか、あるいは修正されていく可能性もあるだろう。

このように、本書に関してさらに掘り下げる余地のある点をいくつか指摘したが、日本でおそらくはじめて英語圏の近世漁業史研究に焦点を当てた単著が刊行されたことの意義は大きい。また、本書の扱う主題は、経済史にとどまらず、本文でも触れられているような「水夫の養成所論」（二二一―二三頁）や強制徴募の問題、あるいは漁場や漁業権をめぐる問題を通して、海軍史や外交史にもつながりうるものであり、様々な発展の可能性を秘めている。今後のさらなる研究の展開を期待したい。

（二〇二五年六月刊、九州大学出版会、B116二頁、五〇〇〇円）

注

- （1）阿河雄二郎『近世フランス王権と周辺世界——王国と帝国のあいだ』（刀水書房、二〇二二年）、第六章。齊藤豪大「近世スウェーデン漁業政策の展開——魚群到来以前の漁業振興施策の展開を中心に」『経済社会研究』第五九巻第四号、二〇一九年、一〇一―一八頁。齊藤豪大「十八世紀後半のスウェーデンにおける捕鯨奨励と補助金政策——グリーンランド会社（一七七四―一七八七）の支援に注目して」『西洋史学論集』第六〇号、二〇二三年、一〇一―一七頁。高垣里衣『近世ヨーロッパ港湾都市と商業——十八―十九世紀バスク商人と国際商業の展開』（晃洋書房、二〇二五年）、補論一。

- （2）和田光弘「〈研究ノート〉帝国のなかのニューファンドランド——漁業と植民」『史林』、第七五巻一号、一九九二年、九九―一一八頁。斎藤真琴「クラダ漁民とゴルウェイ湾——十九世紀初頭アイランドの漁村騒擾から」『森村敏己・山根徹也編『集いのかたち——歴史における人間関係』（柏書房、二〇〇四年）、六二―八四頁。坂本優一郎「海と経済——漁業と海運業から見る海域社会史」金澤周作編『海のイギリス史——闘争と共生の世界

史』(昭和堂、二〇一三年)、七九～九九頁。

- (3) Ian K. Steele, *The English Atlantic 1675-1740: An Exploration of Communication and Community* (New York and Oxford: Oxford University Press, 1986), pp. 62-3, 68-71, 75-6.

- (4) Wim Klooster, *Illicit Riches: Dutch Trade in the Caribbean, 1648-1795* (Leiden: KITLV Press, 1998), pp. 95-7.

(本学文学部教授)